

シンポジウム

「小児期固形腫瘍治療の最近の進歩」

司会のことば

小西 徹

富山医科薬科大学小児科学教室

小児期に発症する悪性の固形腫瘍としては、神経芽細胞腫、ウィルムス腫瘍、肝芽腫、悪性リンパ腫等が高頻度である。成人の悪性腫瘍に比較して極めて進行が早い、未熟または幼若な組織を示す、骨髄などへの転移・白血病化が多い、発症年齢がほぼ決まっている、等の特徴がある。これらの特徴を有する為にその診断は迅速でかつ正確さを要求される。また、治療面においても患者が人生のまだ大半を残した小児であることも考慮して強力でかつ完全治癒をめざした治療法が求められる。

近年、診断面においては各種腫瘍マーカーの臨床応用、遺伝子解析や核医学を含めた画像診断のめざましい進歩があり、治療面においては多種類の化学療法剤の開発と超大量療法の確立、小児外科学の進歩などがあり、小児期固形腫瘍の予後は急速に向上してきている。今回のシンポジウムではこれら診断・治療の最近の進歩およびトピックスを小児科的、小児外科的、放射線科的観点から発表していただいた。また、日本小児癌・白血病研究グループの中心である愛知医科大学小児科教授藤本孟男先生をお招きし、貴重なコメント、今後の展望を拝聴することができ有意義な会になったものと確信している。

以下に発表の内容を簡単に述べる。診断面では、1) 小児科より、現在全国的に行われている神経芽細胞腫のマスキングの現状(富山県での集計を含む)とその問題点が提示された。2) 放射線

科より、最近の画像診断技術、核医学診断の実際についての報告があった。特に、神経芽細胞腫に選択的に集積する核種の臨床応用については診断・治療の両面からの効果が期待できる。つぎに、治療面では、1) 小児科より、小児癌研究グループの最近の化学療法と、超大量療法を行うにあたっての感染予防法に関する実際的な報告が行われた。2) 、3) 小児外科より、固形腫瘍治療における外科の役割、支持療法と題して、外科手術と化学療法の関係につき実際の症例についての報告があった。4) 放射線科より、悪性リンパ腫も含む照射療法の有効性と実際の症例についての報告があった。いずれの発表も臨床的なことに主眼をおき、発表後の討論でも直接臨床に関係する話題が多く出され、より実践的なシンポジウムであり今後の診療に反映されるものと思われる。

最後に今回のシンポジウムをとおして、小児悪性腫瘍の治療にあたっては、小児科、小児外科、放射線科などを中心とした多くの診療科の連携、チーム医療の必要性をあらためて痛感した。また、特別講演に来ていただいた藤本教授の「小手先の治療戦術ではなく治療戦略をたてる」の言葉に、その研究態度に感動するとともに、小児悪性腫瘍の完全治癒、Total therapy が可能となる時代が近い将来に訪れる期待を抱かせた。